

終助詞から考える文章の効果的な書き方

抄 録

ある推理ドラマの中に終助詞(文の最後につく助詞)が登場したことをきっかけに、終助詞に興味を持った。終助詞を用いて文に意味を付加させる方法についての研究は充分になされていなかったことから、本研究ではそれぞれの終助詞の持つ意味から、文章に意味を持たせる方法を明らかにすることを目的とした。文献調査・分析の結果、終助詞にはそれぞれの表す感情があり、質問・呼びかけ・主張・怒り・詠嘆・人から聞いたことの七つに分類できた。また、話し手と聞き手の関係・言い方・性別によって使い分けることもできた。このように、本研究で終助詞には「感情」「話し手と聞き手の関係」「言い方」「性別」の四つの要素があることが分かった。そのため、自分の表現したい意味や要素を終助詞に当てはめることで、文章に意味を持たせることができると考えられる。

キーワード：国語，文章，終助詞，意味

1. はじめに

1.1 研究動機・先行研究

きっかけは、ある推理ドラマである。そのドラマでは、文章心理学を応用させて事件を推理していくという設定だったが、実際には筆跡を用いた分析等文章心理学以外の手法を用いているものも多く、その手法の一つに終助詞というものが登場した。終助詞とは、文末にあって、疑問や禁止、詠嘆・感動・念押し・確述などの気持ちを添えて文を締めくくる働きの助詞の総称である(松木、2007)。そこで、終助詞の持つ意味に興味を持ち、その意味を短い言葉である終助詞が持っていることを利用して、より意味を持つ分が書けるのではないかと考えた。しかし、関連として福島・岩崎・渋谷(2008)や米澤(2005)は見られたものの、このような疑問に対しての研究は充分になされていなかった。

福島ほか(2008)は、終助詞“よ”と“ね”を使用して話した発話者が、聞き手にどのような印象を与えるのかを調査し、二つの終助詞の与える印象を明らかにした。しかしながら、印象以外の終助詞の持つ細かい意味や、その使い分け方、また、“ね”と“よ”以外の終助詞に置いての調査はなされておらず、明らかにされていない。また、米澤(2005)は、終助詞の使用頻度及び性差の傾向を調査したものだが、性別による使用頻度の偏りを数値で示すことはされているものの、そこから終助詞にみられる性差傾向を考察するには調査が足りない。加えて明確な結果が記されていない上に、性別という観点以外での終助詞の調査はされておらず、そこから文に意味を持たせる使い分け方についても

明らかにされていなかった。

1.2 研究目的

そこで本研究では、終助詞の持つ意味から文に意味を付加させる方法を模索し、終助詞を用いた文章の効果的な書き方を提案することを目的とする。

2. 研究方法

終助詞についての文献や先行研究から、それぞれの終助詞の持つ意味を調べる。そして、それぞれの意味から共通する要素を探し、使用する用途や意味ごとに分類して、日常の中で使用できるようにする。なお、今回の研究対象は日本語の現代語の終助詞のみである。

3. 研究結果

3.1 感情ごとの終助詞

今回調査した終助詞を、それぞれ使用されるときの話し手のもつ気持ちごとに分類した。すると、大きく質問・呼びかけ・主張・怒り・詠嘆・人から聞いたことの七つに分類できた。細かく分類することもできたが、今回は省略する。

表1 感情ごとの終助詞

感情	終助詞
質問	い・か・かい・かしら・かな・け・だっけ・だって・って・の
呼びかけ	さ・な・なあ・ね・わ・や・よ
主張	こと・さ・ぜ・ぞ・だい・ったら・とも・ね・もの・よ・わ
怒り	い・が・かい・けれども・ぜ・たら・ったら・って・ってば・とは・な・のに・もの・ものか・ものを・よ
詠嘆	が・かな・こと・ことか・だい・といたら・とは・なあ・ねえ・ものを・よ
希望・依頼	かしら・がな・こと・たら・なあ
聞いた	だって・って

このような感情ごとの終助詞を使い分けることで、終助詞という短い言葉の中に様々な感情を込めることができる。

3.2 印象ごとの終助詞

3.1で分類したものの内、同じような感情の時に使用する終助詞でも、柔らかく言うときに使うものや、軽く言うときに使うものがある。その与える印象が

特徴的なものを挙げる。

表2 印象ごとの終助詞

印象	終助詞
柔らかい言い方	い・かしら・こと・わ
甘えた言い方	たら・ったら・もの
皮肉な言い方	こと・のに
軽い言い方	さ

このような表現は、使用されるときの話し手の感情に加えて、言い方という要素になり、より一つの終助詞に意味が込められるようになる。

3.3 話し手と聞き手の関係ごとの終助詞

終助詞の中には、話し手と聞き手の関係ごとに使い分けるものもある。その関係によって使用が限定されるものと、されないものを分類した。

表3 話し手と聞き手の関係ごとの終助詞

関係	終助詞
親しい間柄でのみ使用	い・かい・さ・ぜ・た・だっけ・たら・ったら・ってば・もの
関係にかかわらず使用	か・が・かしら・かな・がな・け・けれども・こと・ことか・ぞ・だって・といたら・とは・とも・な・なあ・ね・ねえ・の・のに・のか・よ・わ

今回は資料に「親しい間柄で使う」「砕けた言い方」などと、はっきりと明記されているもののみそうとした。親しい間柄でのみ使用する終助詞を、目上の方や初対面の人に軽々しく使ってしまうと失礼に値するため、使い分ける必要がある。親しい間柄でのみ使用する終助詞を使用すると、話し手と聞き手が親しい間柄であることを暗に示すことができる。

3.4 性別と終助詞

終助詞には、「女性が主に使うもの」と「男性が主に使うもの」が存在し、それぞれを「女性語」と「男性語」、あるいは「女言葉」や「男言葉」と表すことがある。このように性別によって使い分けることが出来る終助詞を挙げる。

表4 性別ごとの終助詞（男性語・女性語）

性別	終助詞
女性語（女言葉）	かしら・こと・だわ・てよ・ね・ねえ・の・のよ・もの・よ・よ ね・わ・わね・わよ
男性語（男言葉）	かい・かなあ・さ・ぜ・ぞ・とも・な・なね・なよ・や・よ

以上の終助詞を使うと、話し手の性別を表すことが出来る上に、女らしさや男らしさを表現することができる。

4. 考察

3.1で挙げた感情ごとの終助詞の使用例を挙げる。例として、「今日はいい天気だ」という文を使用する。この文に、二種類の終助詞をつける。怒りの感情の時に使う終助詞「ってば」を使用すると、「今日はいい天気だってば」という、今日がいい天気であることを聞き手に対して苛立たしく思いながら、話し手が主張しているような文になる。しかし、詠嘆の感情の時に使う終助詞「なあ」を使用すると、「今日はいい天気だなあ」という、先ほどとは違い穏やかに、自分自身に向かってつぶやくような文となるのだ。このように、同じ文でも最後につける終助詞の持つ感情によって、これほどの意味の差が生まれることが分かる。このことから、3.1で挙げた感情ごとの終助詞を使い分けることによって、終助詞という短い言葉の中に様々な感情を込めることができると考えられる。

また、3.4で挙げた性別ごとの終助詞についても、例を挙げる。先ほどと同じ「今日はいい天気だ」という文の最後に、女性語の終助詞「わ」と、男性語の終助詞「ぞ」をつける。すると、女性語の方は「今日はいい天気だわ」という文、男性語の方は「今日はいい天気だぞ」という文になり、終助詞を変えることで話し手の性別の違いが強調されるようになる。このように、終助詞は短い言葉の中で性別も表すことができる。

前章で、終助詞の「感情」「話し手と聞き手の関係」「印象」「性別」という四つの要素をあげた。以上のようなことも踏まえて考えると、この要素に、自分の表現したい意味や要素を当てはめることで、終助詞に意味を込めることが出来ると考えられる。例えば、呼びかける意味で、親しい間柄の相手に軽く、男性が「今日はいい天気」という文を言う場合、終助詞「さ」があてはまり、「今日はいい天気さ」という文になる。このように、文章に終助詞を用いて意味を込めたいときは、四つの要素にその意味を当てはめるとよい。

また、なぜ終助詞の一つである終助詞がこのように多くの意味を持っているのか。それは、「終助詞は対聞き手意識から発話の中で話者の種々の感情が顕在化した語という点で、他の助詞とは一線を画している」（森田・松木，1989）ためである。

他にも、3.4で述べた性別ごとの終助詞について調べているうちに、女性語・男性語は、日本の歴史に深く関わっていることが分かった。中村（2012）によると、明治時代に標準語を定めた際、標準語に東京語が採用された理由に「京都語は男が使うには弱弱しいから東京語を採用する」というものがあった。当時の男尊女卑の影響もあるのか、言語一致論争が「国語の話し手は男性国民だ」という前提に基づいていたため、「男の国語」の創成を目指していたのだ。男性の使用する言葉を基準に標準語が定められていたことが、このことから分かる。つまり、男性の標準的な言葉遣いは標準語、女性の標準的な言葉遣いは女言葉ということなのだ。また、男言葉は標準語の中でも特別な男性を表現する言葉遣いということになる。女性語についての記述に対して、男性語についての記述が少ないのは、そのためかもしれない。

このように、昔から使われてきた終助詞の背景には、日本の歴史が関わっていると考えられる。その時代背景や使用用途と、終助詞の持つ意味にどのような関わりがあるのか。本研究を広げていく中で、興味深い点である。

5. 結論

本研究において、「感情」「話し手と聞き手の関係」「印象」「性別」という四つの要素に自分の表現したい意味や要素を当てはめることで、文に意味を付加させ、文章を効果的に書くことが出来るという研究結果が得られた。しかし、課題もある。今回調査した終助詞は、辞書などに載っていた一般的なもの、すなわち標準語で使用されているものだ。だが、日常の中では方言が多く使われており、標準語は日本語の一部に過ぎない。私達が使っている言葉も、大阪の方言である大阪弁だ。このような方言の最後につく言葉、「ねん」のようなものも終助詞といえるのかどうか。また、終助詞と言えるのならば、それはどのような意味を持ち、どのような分類に分けられるのかを今後調べていきたい。また、考察でも述べたように、終助詞の背景には日本の歴史が深く関わっている。その関わり方は、どのようなものがあるのか。そして、その背景がどのような影響を及ぼし、終助詞にどのような意味、使われ方を与えたのかという点を、今後明らかにしたい。

参考文献・論文

- 中村桃子（2012）『女ことばと日本語』株式会社岩波書店
新村出・編（2018）『広辞苑 第七版』株式会社岩波書店
野田春美（2016）『終助詞による表現の広がり—周辺的な用例から見えてくること』
福島和郎・岩崎庸男・渋谷昌三（2008）『終助詞“よ”と“ね”の発話が発言者の印象に及ぼす効果』
村田水恵（2007）『入門 日本語の文法』株式会社アルク
森田良行（2007）『助詞・助動詞の辞典』株式会社東京出版
森田良行・松木正恵（1989）『N A F L 選書5 日本語表現文型』株式会社アルク
山口秋穂・秋元守英（2011）『日本語文法大辞典』株式会社明治書院

米澤晶子（2005）『終助詞の使用頻度と性差傾向—シナリオを資料として—』

インタビュー

株式会社新潮社 文庫出版部 新潮文庫編集部の方